えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第94号
平成28年
(2016)
11 − 12

江戸東京博物館友の会会報

目次

築地の歴史探訪……1〜2
第8回えど友研究発表会……3
えど友広小路……4〜5
　会員からの投稿「田辺一鶴伝説と東京オリンピックの思い出」／サークル紹介「かっぽれの会」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
友の会セミナー
　「渡し舟から橋梁へ　〜明治初期の架橋事情〜」……6
友の会セミナー「徳川水軍と向井将監」……7
学習会「練馬区立石神井公園ふるさと文化館」……8
友の会特別企画
　「絢爛豪華！大名行列を模した川上音二郎の葬列」……8
友の会特別観覧会
　「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」……9
江戸博クリップ「私と博物館」……9
江戸名所図会を歩く…㉘［氷川明神社から神仙水］……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11〜12

築地の歴史探訪

築地市場の豊洲市場への移転について大きな話題になっています。豊洲市場に移転した場合でも築地場外市場は残ります。しかし、築地の町の様子は大きく変わっていくものと思われます。そこで、築地市場とその周辺の築地、明石町を歩いて、歴史の痕跡を探してみました。

築地本願寺と波除稲荷神社

東京メトロ日比谷線築地駅を出ると、インド様式の外観が印象的な本堂のある築地本願寺が見えてきます。この本堂は、大正12年(1923)の関東大震災に伴う火災によって焼失したため、昭和9年(1934)に再建されたものです。

明暦3年(1657)1月、江戸城をはじめ多くの武家屋敷・町屋を焼き、死者数は数万人とも10万人以上ともいわれた「明暦の大火」が起こりました。この大火で、京都西本願寺の別院として浅草御門近くの横山町にあった江戸浅草御堂も焼失しました。その再建のため、幕府の区画整理によって八丁堀の海上が下付され、海を埋め立てて土地を築きました。それが「築地」という地名の由来になっています。延宝7年(1679)に、隣接する現在の築地場外市場の方向を向いて本堂が再建され、「築地御坊」と呼ばれました。場外市場の辺りは寺内町で、現在でも場外市場の中に円正寺、称揚寺、妙泉寺の3カ寺があります。

▲波除稲荷神社

市場橋の交差点を隅田川の方向に進むと波除(なみよけ)稲荷神社が見えてきます。この神社の由来によれば、荒波の影響で埋立工事が難航していたある晩、光を放ち漂う御神体が見つかり、万治2年(1659)、現在地に社殿を建てて祀ったところ、波が収まり工事が順調に進んだことから、「災難を除き、波を乗り切る」波除稲荷様として信仰を集めるようになりました。6月に行われている「つきじ獅子祭」は、雲を従える龍、風を従える虎、一声で万物を威伏させる獅子の巨大な頭を担いで回ったことが始まりとされています。現在の獅子の大きさは、雄獅子は高さ2.4m・幅3.3m・重さ1t、雌獅子は高さ2.15m・幅2.5m・重さ700kgもあります。

浴恩園

埋立地の築地には、寺社の他に大名の蔵屋敷、中屋敷、下屋敷などもできました。尾張の殿様は、船が出入りできる大きな池を設け蔵屋敷としました。米や木材の他、国元で焼かせた瀬戸物を運び込み、御用商人を通じて江戸市中に売りさばいていました。

築地市場正門の壁に「浴恩園跡」の説明板があります。この場所は、元々は5万坪もある小田原藩稲葉家の屋敷で名園とうたわれた「江風山月楼」がありました。その後、このうちの1万7千坪が一橋家の所有となり、寛政4年(1792)には、寛政の改革を推し進めた老中松平定信(白川藩)が

▲江戸浴恩園全図（国立国会図書館所蔵）

譲り受けて下屋敷としました。定信は一橋家の恩恵を受けたという意で、ここを「浴恩園」と命名し、庭園に海水を引き込み、春風の池・秋風の池を囲む築山にそれぞれに桜と紅葉を配した海辺の景勝地、汐入庭園を作庭しました。文化９年(1812)、定信は隠居して楽翁と名乗り、天下の名庭園とうたわれた浴恩園に住まい、優雅に晩年を過ごしました。しかし、この庭園は文政12年(1829)の大火で灰塵に帰し、同年に定信も72歳の生涯を閉じました。その後は海軍省用地となり、著しく園池の風景を変え、残っていた二つの池も関東大震災で跡形もなくなってしまいました。

明石町界隈

築地駅３出入口近くのデニーズの角を曲がった所の道は「聖ルカ通り」で、少し進むと築地川公園に出ます。ここから左手の地域が明石町になります。公園の先は聖路加国際大学で、その建物の手前に、芥川龍之介誕生の地の説明板と、都旧跡浅野内匠頭邸宅跡の石碑とその説明板がありました。それらによると、芥川龍之介は、この付近にあった乳牛の牧場経営者の長男として生まれました。また、聖路加国際病院を含むこの一帯は、かつて赤穂藩主浅野家の江戸上屋敷でした。

ここを左折して進み、「居留地通り」に出た所を右折すると明石小学校があります。この校舎は、平成25年に建て替えられていますが、旧校舎(関東大震災後の復興小学校の一つ)のデザインが生かされ、向かいの聖路加国際病院旧館とも調和しているように思われました。小学校の角に、「築地外国人居留地跡／ガス街灯の柱」説明板とガス街灯があります。明治元年(1868)、明石町に築地外国人居留地ができ、公使館や領事館が置かれ、宣教師・医師・教師などの知識人たちが教会や学校を数多く開いて教育を行っていました。この辺りを歩いていると、「慶応義塾発祥の地」「雙葉学園発祥の地」「女子学院発祥の地」「立教学院発祥の地」など、○○発祥の地という石碑を数多く見ることができます。

明石小学校と道路を挟んだ向かい側にカトリック築地教会があります。ここのギリシャ神殿風の聖堂は、木造モルタル造りで、東京都選定歴史的建造物になっています。聖路加国際病院にあるトイスラー記念館は、昭和８年に聖路加国際病院の宣教師館として建てられたヨーロッパの山荘を思わせる建物です。明石町は静かで、時がゆっくりと流れているように感じられます。

▲カトリック築地教会

築地市場

築地市場は、日本橋魚市場と京橋青物市場(大根河岸)の流れを引き継いだ水産物と青果物を取り扱う総合市場です。関東大震災後、幾多の曲折を経て昭和10年、海軍省の所有地を取得して開場しました。面積は、23ha(東京ドーム５個分)もあります。建物が扇形にカーブしているのは、鉄道便による入荷を行うため2000ｍ以上もの鉄道線路を敷く必要があったからです。浴恩園にあった池などを埋め立てており、地盤が軟弱なので数千本の松杭、コンクリート杭を岩盤まで打ち込みました。工事期間短縮のため、扇形の両端から同時に鉄骨の組み立てを行うなど、様々な難工事を克服して完成させました。戦時中の空襲による被害は少なく、戦後、青果部の建物が米軍に接収されて洗濯工場になり、昭和30年に返還されました。

物流の主流が鉄道便からトラック便に移ってきたため、昭和62年に引込線を廃止しています。築地市場の平成26年の１日当たりの取扱数量と金額は、水産で1676ｔ、16.1億円、青果は1095ｔ、3.2億円です。取扱金額は世界一です。

▲旗山の石碑

築地市場内に魚河岸水神社遥拝所があります。明治34年に神田明神の境内に「魚河岸水神社」本殿が建立され、日本橋魚市場が関東大震災以後、築地に移転するのに合わせて現在地に遥拝所が建立されました。以来、築地魚市場の守護神として「水神さま」と呼び、魚河岸会の人々によって大切に守られています。魚河岸水神社遥拝所は、豊洲市場への移転に合わせて移る予定です。境内にある「旗山」の碑は、浴恩園内の築山に海軍卿の旗が掲揚されたため旗山と呼ばれ、それを記念して建てられた碑です。築地市場が開場した時期に元の位置から移ってきました。日本海軍発祥の地を記す史跡です。また、浴恩園全図のレリーフと碑文が遥拝所の石垣に埋め込まれています。

※参考資料
森清杜著『「築地」と「いちば」　築地市場の物語』都政新報社
福地享子著『築地市場　クロニクル１６０３－２０１６』朝日新聞出版

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

第８回　えど友研究発表会（平成 28 年８月２日）

地元再発見と近代文学の夜明けについて２氏が発表

「えど友研究発表会」は今年で８回目になりました。今回は、早川さんが「徳川家康・鴻巣御殿とその周辺」、内山さんが「田端文士村の成り立ち」について発表しました。参加者は56人でした。

徳川家康・鴻巣御殿とその周辺

早川良躬（よしみ）さん

今年は徳川家康没後400年ということで、地元の鴻巣市では、鴻巣御殿にも関心が高まり、市長は「鴻巣御殿の模型を作る」と約束しているので楽しみにしています。

鴻巣御殿は、「江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館所蔵）に描かれています。この「江戸図屏風」には徳川家光の事績に関するものと江戸市街の景観（大名・寺社の建築、風俗、年中行事）が描かれています。ただし、いつ、誰が制作したのかは不明です。「江戸図屏風」右隻第１扇及び第２扇には、鷹場から鴻巣に向かってくる家光一行の行列と、鴻巣御殿に到着した家光と御殿、中山道の場景が描かれています。一行の先頭に立つのは、左手に鷹を据えた鷹匠（手鷹師）７人。いずれも帯刀し、股引き、脚絆の実行姿。次が追鳥狩用の竿を立てての無腰３人などが続き、帯刀の３人が引く黒駒の背には虎皮の敷物、家光の乗馬用と思われます。家光自身は、紋付羽織の近従に囲まれ駕籠の中にいます。鴻巣御殿は、板葺きや茅葺きの町屋が続く中山道から少し入った所に建っていました。道に面した表御門（冠木門（かぶき））をくぐり、次の内御門を進むと御殿に達します。それぞれに御門番所が付属しており、敷地の四隅にも番所があります。さらに進むと鷹部屋が見え、その右脇、柿（こけら）葺きの屋敷で緑の毛氈に坐しているのが将軍家光です。中山道沿いの家屋はみな宿屋と思われます。家光の鷹狩に随行してきた大名たちの家紋を染め出した幕が張られています。

鴻巣御殿は、文禄２年（1593）に造営され、その敷地は１町４反歩（4200坪）もありました。約50年にわたって用いられましたが、明暦の大火後、江戸城再建用の部材としてかなりの建物が解体、移築になり、その後、元禄４年（1691）に除地となったことで姿を消しました。

家康の鷹狩の嗜好は尋常でないものがありました。慶長18年（1613）の自ら作成した放鷹（鷹狩）日程（道中宿付予定経路）を見ると、10月は12日葛西、16日千葉、17日東金、24日千葉、25日葛西、26日江戸と書かれています。家康は、「鷹狩は全く軍法調練のためなり」と、鷹狩り好きの本質的理由を披歴しています。鷹狩を行い、他者にも許し、勝手に行う者を罰するのは王者の専権であり、仁徳天皇43年（355）、百済から伝わって以来変わることのない法でありました。

地元の町史を見ると、村民は法度による各種の禁止事項や負担が多く、その苦衷が書き記されていました。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

田端文士村の成り立ち

内山文伸さん

仮名草子や、浮世草子と呼ばれる小説に始まり、洒落本、滑稽本、人情本などといわれる江戸文学の作品があります。これらは仮名書きと絵入りの読み物でしたが、明治に入ると文章だけのいわゆる「文学」が出現します。文は文語体ですが、会話の部分では口語体を使う雅俗折衷文体に続いて、明治も末になると二葉亭四迷、尾崎紅葉、山田美妙などによってようやく言文一致体が確立されていき、普通に話す言葉で文章を書くことが始まります。これぞ近代文学の始まりといえるでしょう。

明治30年（1897）以降、東京近辺には文士村と呼ばれる所が10カ所ほどもありました。我孫子、本郷、牛込、大森、落合、鎌倉など広い範囲にわたっています。今回取り上げる田端もその一つですが、なぜ取り上げるかというとその成り立ちが分かりやすいからです。

田端は江戸時代には武州豊島郡田端の郷と呼ばれ、明治中期までは閑静な武蔵野の雰囲気を残す江戸近郊の農村でした。これが大きく変わるきっかけとなったのは明治22年の東京美術学校の開校と、明治29年の東北本線田端駅の開業です。上野の山と田端は直線距離にして２、３キロで、徒歩40分ほどの近さでした。地価も東京市中に比べると極端に安価でした。ここに最初に足を踏み入れたのは明治33年、画学生だった小杉未醒、後の洋画家小杉放庵です。当時の田端にはまず陶芸家や美術家たちが集まり、「芸術家村」とも「画家村」とも呼ばれました。明治36年には陶芸家、板谷波山も田端に窯を開き、田端芸術家村の元祖といわれました。その後、類は友を呼ぶといいましょうか、安価な土地を手に入れることのできる田端地域には明治の末から大正にかけて芸術家たちが集中するようになり、互いに交流を深めていくことになります。

田端が「文士村」として注目されるようになるのは、芥川龍之介が大正３年（1914）に移り住んでからでした。芥川はまだ22歳の学生でしたが、すでに『羅生門』や『鼻』などで知られており、芥川を慕って作家や詩人たちも集まるようになっていきます。大正５年には室生犀星も暮らすようになり、芸術家たちと文士たちの交流が、村・群れとして発達します。若い芸術家たちは経済的には決して豊かではなく互いに助け合っていましたが、実業家の鹿島龍蔵が明治44年に田端に移住して、芸術家・文士の境なく経済的な支援を行っていたのも、田端文士村の発展にとっては欠かせない要因でした。しかし、この文士村も関東大震災後の田端のベッドタウン化や、昭和２年（1927）の芥川龍之介の自死によって、消滅していくことになります。

【記録】文：広報部会・中村貞子
写真：同・前田太門

会員からの投稿

田辺一鶴伝説と東京オリンピックの思い出

松　原　　良

昨年11月のある日、私は国立演芸場にいました。この日「講談まつり七回忌追善　奇才　田辺一鶴伝説～新作の遺伝子」が開催されていたのです。一鶴さんは独特の「ひげの講釈師」として数々の新作で話題を呼び、それらが今回一鶴伝説といわれるようになったのです。もう七回忌になるのかという感慨にふけりながら、お弟子さんたちのそれぞれの一鶴を聴かせてもらいました。

田辺一鶴さんといえば、1964年のオリンピックでの入場行進を実況風に講談化した「東京オリンピック入場行進」という新作で、当時一躍売り出した若手講談師でした。私も当時この講談を聴いて感銘を受けた記憶があります。

東京オリンピック開会式の日・10月10日は快晴でしたが、新婚早々の私たちは神宮外苑に向かっていました。国立競技場での開会式に向かう行列を外苑で見ようという魂胆でしたが、着いたときは外苑への立ち入りが禁止された直後でした。このため、直接見るのはあきらめ、渋谷へ行き、フルーツパーラーのテレビで開会式・入場行進を見たのでした。この間、お店の客、店員とも全員がテレビ画面に見入っていたのが印象的で、94カ国による入場行進を全部見て大変感動しました。こんな私自身の体験を思い出しながら、一鶴さんの講談を聴いたものでした。

それから数十年、ひょんなことから一鶴さんと知り合いになりました。雑俳の句会でたびたび顔を合わせ、旅行句会では同じ部屋に泊まったりするようになったのです。こうして身近に接して分かったことは、一鶴さんはサービス精神がとても旺盛だということでした。句会後の打ち上げの飲み会などでも、あの「東京オリンピック入場行進」を(無料で)聞かせてくれたのです。

この「東京オリンピック入場行進」は、一鶴さんのお別れの会のとき、参列者に非売品のDVDの形で配られましたので、私もいただきました。このDVDは私だけが秘蔵していてももったいないと思い、えど友サークル「落語と講談を楽しむ会」で最近皆さんに聞いてもらいました。

それはさておき、4年後には再び東京でオリンピックが開催されます。そのとき、一鶴さんの弟子の中から師匠と同じようにオリンピックをネタに一躍スターになる人が現れてほしいと願っています。それまで私も元気でいて、何かその応援ができればいいなと思っています。

えど友　サークル紹介

◤かっぽれの会◢

主宰者の鈴木正文さんは、鈴乃家流かっぽれの家元で、鈴乃家梅奴が芸名です。大学卒業後まもなく、幇間の初代櫻川ぴん助に弟子入りしたのをきっかけに、現在まで続けておられます。その鈴木さんに「かっぽれの会」立ち上げについて色々伺ったところ、以下のように説明されました。

〔江戸東京博物館にふさわしいサークルだと考えたからです。しかし、なかなか習いたがる人がいないのが実情です。

幕末から明治にかけて梅坊主が始めた「かっぽれ」ですが、庶民文化にふさわしく？語源については諸説あります。私は「活惚（かっぽれ）」を使っています。明治30年代ごろ、寄席で噺家さんが芸として確立し、その後幇間さんへ伝わったものとみています。しかし、なかなか皆を納得させる説のないのが現状です。

▲稽古風景

発祥については大阪住吉大社の住吉踊り説が有力ですが、600キロも離れているものが、そう簡単に伝わるであろうかというのが疑問です。また大道芸であったものが、いつ寄席芸になり、幇間芸になったのであろうか。さらに寄席芸として確立された時期もはっきりしません。田植え踊りである住吉踊りが、どういうきっかけで座敷芸になったのかも分かりません。

私は寄席芸としてのかっぽれが好きなんです。お客さんの一言に、すぐ反応する噺家さんの即興性と粋が好きなんです。ですから幇間や大道芸とは一線を画しています。元々男の芸ですが、最近では弟子の95%が女性、指導者もまた女性が多いそうです。私が浅草にも教室を持っているのは、私自身浅草生まれでもありますから、地元の若旦那衆に踊ってもらいたいからです。ところが、地元の人は来ずに中央線の向こうから来る人が多い。旦那衆がいなくなったことも影響しているかもしれません。

浅草で小学生に教えたいと何度も働きかけましたが、いつもなしのつぶてです。山形では、「花笠踊り」が踊れない小学生はいないでしょう。浅草ではなぜ「かっぽれ」をやらないんですかね。学芸会や運動会で披露すれば、親も喜ぶし自分たちも自信がつきます。そんなことを夢見ながら、元気なうちは、伝え続けたいと思っています。〕

ここで生徒さんたちの準備ができたので、早速稽古が始まりました。全員着物に着替え、角帯を締めてから始めるのです。着物の着方、角帯の締め方も丁寧に教えていました。入門曲の「奴さん」が始まりました。

「ちんてんつれつつ　ちんてんつとつと　しゃんちてつて　しゃんとてちん」

最初は口三味線で手踊りをしながら、振り付けの指導をしていました。時に解説も加え、初心者にも理解できるよう経験からくる工夫がなされていました。一通り終わると、テープに合わせての稽古です。合間に掛け声を入れながら、言葉は優しいが、要点については厳しさがうかがえる指導はさすがです。厳しいといっても、初心者向けの厳しさです。今後レベルが上がるに従い、さらに厳しくなるでしょうが、伝統芸を守り伝えることの真髄はこのあたりにあると

思います。それにしても皆さん、一生懸命に張り切って稽古に励んでおられたのが印象的でした。
【取材】文・写真：広報部会・光田憲雄

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会
８月17日(水)島田昭さんの月番でお江戸両国亭にて８月女流講談会「怪談」を鑑賞した。宝井琴柑他４人の女流講談師の講談を楽しんだ。参加者15人。
９月27日(火)島田昭さんの月番で宝井琴柑さんの案内による代官山から恵比寿までの講談の地歴史散策をした。参加者17人。

◆藩史研究会
８月休会。
９月９日(金)国定美津子さんが「三河国西大平藩」(現在の岡崎市の東部)について発表した。初代藩主は大岡越前守忠相。72歳の時１万石の大名格となり３年後75歳で病没した。発表は忠相を核にしながら三河の地理、大岡家の発祥など細部にわたる内容で充実していた。参加者14人。

◆「米屋田中家文書」を読む古文書の会
８月26日(金)明治３年の「町用日記」Ｐ146～162まで読む。捨子について。参加者９人。
９月８日(木)「町用日記」Ｐ163～177まで読む。新しい税法が布告され、土地・家税のさまざまなケースについて掲載。このほか、町民も苗字が許可されたことが記されている。参加者10人。
９月23日(金)「町用日記」Ｐ178～191まで読む。参加者10人。

◆江戸東京を巡る会
９月17日(土)赤坂氷川神社の祭礼を見学してから同神社を参拝した。祭礼の巡行は山車の行列という今の東京に類を見ないもので往時はかくありと感激した。その後、乃木神社を参拝。旧乃木邸は公開中で、大将夫妻の遺徳をしのんだ後、旧勝邸に完成したばかりの勝海舟・坂本龍馬像を見学した。参加者49人。

◆『江戸名所図会』輪読会
８月休会。
９月15日(木)担当は高野祐子さん。今回は上落合の泰雲寺と、小石川の牛天神社と諏訪明神社である。黄檗派の禅宗、泰雲寺には了然尼についての故事があるが、明治末に白金瑞聖寺に吸収合併され、今、一帯の上落合１丁目は落合水再生センターとなっている。牛天神社は水戸徳川家の上屋敷に流れ込む神田上水堀端にかなりの敷地で建っていたが、今はそのごく一部のみである。参加者16人。

◆日本の大道芸伝承会
８月10日(水)本年11月５日(土)に開催される深川江戸資料館創立30周年記念及び日本大道芸・大道芸の会創立20周年記念イベントへ応援出演することが決まったため、気持ちを新たに練習に励んだ。参加者３人。
９月14日(水)発声練習(外郎売り、がまの油売り)のあと、各自下記演目を練習した。「絵解　地獄極楽」「わいわい天王」「阿呆陀羅経」「すたすた坊主」「納豆売り」「玉すだれ」ほか。参加者４人。

◆江戸を語る会
８月27日(土)大森美恵子さんが「江戸の災害」の演題で発表した。幕末に近い安政東海・南海地震(嘉永７年・1854)、安政江戸地震(安政２年・1855)の２つの地震は幕府崩壊の一つの糸口になったともいわれている。火山噴火では富士山宝永大噴火(宝永４年・1707)、天明浅間山大噴火(天明３年・1783)が特筆される。参加者10人。

◆かっぽれの会
８月31日(水)入門曲「奴さん」の２番(姐さん)をお稽古した。参加者４人。
９月７日(水)入門曲「奴さん」の２番(姐さん)をお稽古した。参加者３人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会
８月28日(日)第１部主旨、実際の運営方法、マスタープランなどの説明会、第２部太田道灌公第18代子孫の太田資暁さんによる「文武両道の鑑・太田道灌」と題する講演会があった。参加者84人。
９月25日(日)国際フォーラムの太田道灌像をまず見学して鎌倉へ移動、建長寺へ。建長寺は道灌が９歳から11歳まで学んだ所。次いで鶴岡八幡宮に参拝した後、道灌のいわば勤務先だった扇谷上杉管領屋敷跡とされる所に建つ碑を見学。近くの英勝寺は道灌の屋敷跡とも、道灌の生地ともいわれている。裏山(源氏山)にある道灌供養墓を特別見学した。参加者は44人。
９月30日(金)１回目と同じコースを巡った。参加者31人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ｂ班『大伝馬町名主馬込家文書』
馬込家文書「旧記三」には、貞享から寛保年間の町内での家督・跡式・後見・遺言状などについての証文、町年寄との遣取、言上帳並びに遺跡帳付、四谷伝馬町下名主跡役願書一式などが納められている。
ところで「下名主」について一言。大伝馬町は国役として伝馬役が課されており、その負担の大きい伝馬役の助成地として四谷に土地を与えられ、四谷伝馬町とした。ここを支配するため、「家持之内ニ而実躰成者見立」、下名主として置き、大伝馬町名主は上名主と称した。因みに赤坂伝馬町は南大伝馬町の助成地であり、同様に下名主が置かれた。『町方書上』第５巻にその設置経緯が記されている。

友の会めも(開催日と人数)
平成28年８月～９月

◆役員会８月９日(火)15人。(臨時)８月30日(火)19人。９月13日(火)15人。◆事業部会８月２日(火)24人。９月６日(火)24人。◆広報部会８月16日(火)11人。９月20日(火)10人。◆総務部会８月23日(火)19人。◆古文書講座　入門編：９月７日(水)午前95人・午後97人。初級編：９月21日(水)午前台風のため中止・午後77人。中級編：９月24日(土)午前36人・午後48人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト８月４日(木)Ａ班９人。Ｂ班７人。８月18日(木)Ａ・Ｂ班とも休会。９月１日(木)午前Ａ・Ｂ合同会議17人。午後Ａ班８人。Ｂ班９人。９月15日(木)Ａ班９人。Ｂ班６人。

第167回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年8月20日）

渡し舟から橋梁へ　～明治初期の架橋事情～

講師　齊藤　照徳（あきのり）さん（江東区文化財専門員）

はじめに

江戸・東京の東郊地域は河川と掘割が多く、必然的に人や物の移動には渡河をしなくてはなりません。江戸時代には軍事的・技術的・経済的理由などによりあまり橋が架けられず、その代わりとなるのは主に渡し舟でした。しかし、近代になると明治政府により架橋が推進されていきます。渡しから橋に替わっていく時期は一般的に関東大震災後とされますが、今回はこれ以前の明治初期の架橋事情についてお話しします。

江戸・東京の渡し

明治初期の東京府全体の渡船場数は、府境のものも含め68カ所あり、おおむね江戸時代の渡しを反映しているといえます。これを出発地点と到着地点に分けて数えると現在の江東区と江戸川区が最も多く、また68カ所中17カ所は小名木川などの小河川や掘割が集中する下町地域にあり、うち9カ所が江東区域です。つまり、明治初期にあっても東京東郊地域においては渡船が川を渡る重要な手段でした。

江戸時代以来、江東区域には掘割が網の目のように張り巡らされ、物資の運搬に利用されていました。西側の深川地区では明治以降に開設された渡しが比較的多く、東側の城東地区では江戸時代以来の渡しが多くみられます。これらは明治後期から昭和初期にかけて廃止され、渡しから橋へと変化していきます。これが一般的な架橋の傾向といえます。

御厩河岸渡しの架橋

御厩河岸（おんまやがし）渡しは隅田川の浅草御蔵（幕府の米蔵）の近くにありました。元は町人の私営による「自分渡し」でしたが、元禄3年（1690）に幕府の許可により町人が運営を請け負う公的交通機関となりました。それにともない、武士からの船賃徴収禁止や火事・洪水時の増船が渡船場規則に定められ、封建領主的交通機関の役割・災害時の都市機能を備えました。運営実態をみると、18世紀中頃には本来、一時的だったはずの渡船賃2文の増額が恒常化している状況や、請負が実質的な家職として相続対象となっていることなどが分かります。

維新後、明治政府は架橋の必要性を認識していましたが、財政難のため民間による架橋・維持管理を推進します。厩橋の架橋事業は、明治5年（1872）に浅草三好町の日比野泰輔と和田市助が東京府へ自費架橋・通橋料徴収を出願し、翌年に許可されました。しかし、上流地域の村々から橋脚による洪水被害の懸念があるとして反対され工事は中断、側杭を減らすことで洪水対策をして、同7年にようやく完成しました。すると今度は架橋によって失業した御厩河岸渡船営業人から救助金の分配を求める訴えが起こりました。さらに建造費の超過により借金返済に苦慮するようになったため、渡橋銭の増額や管理譲渡を東京府へ出願しましたが却下され、ついに和田と日比野が訴訟で対立する事態に至りました。こうした混迷は民間に橋の経営を任せることの限界を表しています。

逆井の渡しの架橋

逆井（さかさい）の渡しは中川両岸の亀戸村と西小松川村をつなぐ渡しで、両村が舟1艘ずつを所持する「村持ちの渡し」でした。江戸時代には、江戸から下総方面に向う元佐倉道（現在の旧千葉街道）を接続する重要な渡しでした。明治になると陸軍の演習場として習志野が利用されたため、明治天皇が演習上覧で逆井の渡しを通るようになります。天皇行幸や陸軍の物資運搬の際には、その都度、船橋（舟を並べた上に板を載せた仮設の橋）を架けていました。

明治8年に亀戸の丸山伝右衛門が木造橋架橋を出願、東京府も許可する予定でしたが、村方（亀戸村・西小松川村）が水害時の危険性を理由に反対したため、架橋願いを取り下げました。すると同9年には北本所の奥木和三郎、越前堀の勝田重兵衛といった村外の人たちが架橋を出願します。逆井の渡しは一躍、投資を目的とする人々の注目を集めます。

こういった状況を受けて、同10年には亀戸村・西小松川村の両村も自費架橋を出願しますが、その計画は奥木や勝田の出した内容と大差ありません。しかもそれまで反対した理由が治水であったのに、それに対する言及もありません。このことから、水害の危険を理由に反対をしながらも、村方の最大の意図は通橋料徴収の権利獲得にあったのではないかと思われます。最終的に東京府は両村に架橋を許可しましたが、その採択理由は、両村による架橋が橋を恒久的に維持できる最良の方法であり、元々渡船場を運営していた村の特権かつ義務である、となっています。これに対し、渡船営業人の丸山伝兵衛たちは営業権などを主張して異議申し立てを行いますが、結局同11年に橋は完成しました。しかし、やがて逆井橋の経営も不振に陥っていくこととなります。

おわりに

明治初期、交通の要衝にある渡船場は、架橋事業で利益を上げようともくろむ人々の注目を集めましたが、結局は経営が行き詰まり、民間に橋梁運営を委託するという政府の計画は頓挫します。関東大震災後の架橋は行政による都市計画として進められ、橋梁の架設・維持は国や自治体によるものが主流となっていきますが、そこに至る過程には様々な試行錯誤があって近代都市が成立していったことを心の隅に留めていただければと思います。

レポーターからひとこと

普段は公共の橋を無料で渡ることを当たり前と思っていますが、そうでない時代があったことが新鮮な驚きでした。　　参加者126人。

【記録】文・写真：広報部会・菊池真一

第168回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成28年9月10日）

徳川水軍と向井将監

講師　鈴木かほるさん（三浦一族研究会特別研究員）

向井氏について

向井水軍というより向井将監（しょうげん）といったほうが通りがいいでしょう。向井氏は伊勢から東国へ移住した海上軍事官僚であり、徳川幕府滅亡まで船手頭（ふねてがしら）筆頭の地位を保持しました。向井氏は源頼義の流れを汲む仁木（にっき）義長の四子、長宗が伊賀国向庄を給され「向」を称したことが始まりとされます。向庄は伊勢国と伊賀国の国境に位置し、太閤検地で伊勢国に編入されるまでは伊賀国と認識されていました。

「向井」と書かれたのは、7代正重の子、政綱に宛てた武田勝頼朱印状に「向井兵庫助」とあるのが初見です。正重のとき伊勢から駿河へ移住し、今川氏や武田氏に仕えました。徳川家康に仕えたのは政綱からで、将監を号したのはその子忠勝です。以後、将監は向井宗家の称号として幕府滅亡まで世襲されます。

船手頭の創設と御預け体制へ

中世の水軍はほぼ「海賊衆」と呼ばれましたが、秀吉が天下統一する過程において「船手」の呼称が踏襲され、全国化していったようです。中世の軍制は、大名直轄の「寄親」（有力武士）と、寄親に附属する「寄子」（与力・同心）という主従関係で成り立っていました。家康は、この寄親・寄子を大名から切り離し、徳川政権の新しい職制「御預け体制」の中に、「船手頭」と「船手組」（与力・同心）を組み込み、徳川氏の軍船と船手組を船手頭に預け、指揮する権限のみを与えたのです。つまり、船手頭は、軍船を所有しなくても、寄子を抱えなくても、海上活動が可能となったのです。

国際貿易を意識した城下町と海運の整備

家康の関東移封が発表されたのは天正18年（1590）7月13日ですが、その10日前、家康は江戸の下検分を済ませています。小田原攻めの先陣を務める代わりに、源氏所縁の地・関東を所望したようです。松平から徳川へ、さらに源氏へ改称したのも、天下統一を見据える彼にとって、源氏の血統であることが必須条件であると考えていたからです。

八月朔日に「江戸御打入り」したのは、豊作を祝う「八朔祝賀」の日を意識したからです。これは領民支配を根本とする家康の「農根思想」、つまり農民を味方にする方策を反映したものです。

家康の江戸開発は、海外貿易を視野に入れた城下町の建設と、港湾体制の整備でした。当時の江戸はいかにも粗相でしたが、だからこそ、思いのままの町造りや大改造が可能なのです。譜代家臣に土木工事をさせ、京都から茶屋四郎次郎らの政商を呼び寄せ、町割に関与させ、武士では成し得ない町造りをさせました。

そして、城下を輪番で警護させるため、旗本屋敷は一泊で通勤できる範囲に置き、特に船手衆の役宅は海上からの襲撃に備えるため、城下の河口附近へ置かれました。船手衆の本拠地として、江戸内海の入り口にあたる三浦郡三崎には四人衆を、上総富津には三人衆を置いて警護させました。この船手七人衆に対し、陸上の民政支配をつかさどる行政官が伊奈忠次や大久保長安ら4人の代官頭です。

家康が江戸を本拠としたのは、鎌倉にも小田原にもない天然の良港、浦賀があったからだと思います。家康は秀吉が逝去すると、百日忌も経ぬうち、潜伏していたスペイン人宣教師を招き、スペイン商船を浦賀へ寄港させるよう交渉しています。目的は、太平洋の荒波に耐える大型帆船の造船技師と、画期的な金銀製錬の新技術を導入することにありました。徳川政権を全国に展開していくためには、とりわけ金銀の増産が必須であります。浦賀湊にスペイン船を寄港させ、長崎・平戸に並ぶ東国一の国際貿易港とする構想があったと考えます。江戸内海に徳川水軍を置いたのも、スペイン貿易のためでもあったのです。

向井将監と三浦按針

浦賀貿易の統括者としてスペイン貿易に関わっていたのは、向井政綱・忠勝親子です。三浦按針はその通訳として行動を共にすることが多々ありました。家康が按針を重用したのは、英蘭貿易ではなくスペイン貿易のためであり、そのため江戸邸のほか、逸見（へみ）の采地と浦賀邸が与えられたのです。でなければ、ヤン・ヨーステンのように江戸邸のみを与えればよいはずです。

スペインのようなカトリック教国は、商売と布教が一体化した理念を持つ国ですから、家康は通商をしたいがために布教を黙認し、江戸には天主堂を、浦賀には修道院の建立を許可しましたが、信者の増加を危惧して禁教令を発布し、さらに貿易港を長崎・平戸のみに制限しました。こうして、目的が達せられないまま僅か10数年で終焉を迎えましたが、浦賀は国際貿易港として賑わい、欧州にその名を轟かせていたのです。

レポーターからひとこと

ペリーが来たことぐらいしか知りませんでしたが、浦賀の秘めた歴史を知る事ができました。参加者180人。

【記録】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・菊池真一

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成28年８月10日）

練馬区立石神井公園ふるさと文化館を訪ねる

西武池袋線石神井公園駅で下車、駅前商店街を抜け、石神井池（ボート池）に沿って歩くこと15分、石神井公園の一角に練馬区立石神井公園ふるさと文化館はあります。練馬区の歴史や伝統文化、自然などに関する情報を発信する拠点として平成22年３月に開館した新しい博物館です。学習会は、初めに相川詩織学芸員から当館の沿革や特色、常設展示室の概要についてレクチャーを受けました。「ふるさと」にちなんで、ふ（ふれあう）、る（ルーツを知る）、さ（さわれる）、と（取り換えられる）展示がコンセプトだそうです。その後、２班に分かれて常設展示室などを見て回りました。その中から興味深かったものをいくつかご紹介します。

練馬といえばやはり全国的に有名な「練馬大根」。それを加工した「たくあん漬け」の日本最大の産地であり、全国に出荷されていました。明治10年（1877）、第１回内国勧業博覧会で「有名ノ産ヲ以テ製スルカ故ニ、風味美ニシテ日常ノ食膳ニ宜シ」と大久保利通内務卿より褒賞されました。会場には一度に4000本以上の大根を漬け込む大樽が展示され、樽の中で作業する人形の姿が見られました。

また「ある日の夕食」と題し、戦前の農家の夕食が並べられています。麦飯、けんちん汁、芋の煮っころがし、切干大根で、自家製の農作物を食材にしたメニューです。徳利とお猪口が添えられ、今でも十分なご馳走で、思わずゴクリとなりました。

戦前の一大娯楽といえば映画で、昭和10年（1935）大泉に新興キネマ東京撮影所（現東映撮影所）が建設され、多くの作品が制作されました。また練馬区は、日本初の本格的カラー長編アニメ映画「白蛇伝」や、日本初のテレビシリーズ30分アニメ「鉄腕アトム」が制作された、日本アニメ発祥の地です。室内には巨大なアニメーション撮影台が展示されています。この撮影台から「西遊記」「宇宙戦艦ヤマト」「銀河鉄道999」など数々の作品が生まれました。

体験コーナーには、昭和30年代後半の駅前の風景が再現され、懐かしい中華ソバ屋、たばこ屋、駅前交番が夕焼けに浮かび、オート三輪「ダイハツミゼット」や、道端に置かれたコンクリート製ごみ箱も郷愁を誘います。

企画展示室では、特別展「いぬいとみこ」が開催され、児童文学者・岩波書店編集者いぬいの作品の魅力を紹介していました。参加者50人。

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

友の会特別企画（平成28年７月30日）

「絢爛豪華！大名行列を模した川上音二郎の葬列」

講師　高橋　繁行さん（ルポライター・画家）

昨年のインド古典舞踊の鑑賞に続く特別企画第３弾として、明治44年（1911）に亡くなった川上音二郎の葬列の様子を、高橋繁行さんの切り絵と解説で味わう催しが行われました。

最初に日本近代演劇の開拓者と呼ばれる川上音二郎と、日本初の近代女優と見なされている妻・貞奴（さだやっこ）の略歴について解説があり、続いて高橋さん作のＤＶＤ「川上音二郎の野辺送り」の上映に移りました。野辺送りとは、行列を組んで故人を送る弔いのことですが、色鮮やかな切り絵によって大名行列様式の葬列の様子が再現されています。

葬列は大阪北浜の帝国座から道頓堀近くの一心寺まで約6kmの道のりを歩きましたが、先頭から柩（ひつぎ）まで約2.6kmという大規模なものでした。まず先頭の先払い（棒頭）に続く供奴（ともやっこ）が「ひーさーい」「ひやたまえー」「ひゅーとー」という掛け声を順に発しながら練り歩きます。次に立傘や道具を持った奴、徒侍（かち）などを挟んで、花車の長い列が続きます。次がお坊さんの列で、千進僧（浄土宗で

葬儀の指示進行を勤める僧）を乗せた人力車、素襖（すおう）侍・裃侍・布衣（ほい）侍に囲まれた導師の駕籠、後押さえ、宰領、その他の僧と荷物持ちの奴の列が続々と通ります。次はいよいよ遺族の列で、先払い、念仏旗、四本旗、柩の輿、喪主、妻の貞奴と続き、最後が一般会葬者の列となります。切り絵の背景には大阪の町並み、道頓堀五座、橋、市電、見物の群衆などが描かれ、さながら絵巻を見るような楽しさでした。

この葬列を采配した葬儀業者は「駕友（かごとも）」と考えられ、江戸時代に参勤交代などの人足の元締で、明治になって失業したため大名行列を葬列に転用したそうです。さらに市電の開通や車の増加のために野辺送りができなくなると、今度は霊柩車を考案したといいますから、実に商魂たくましいものがあります。

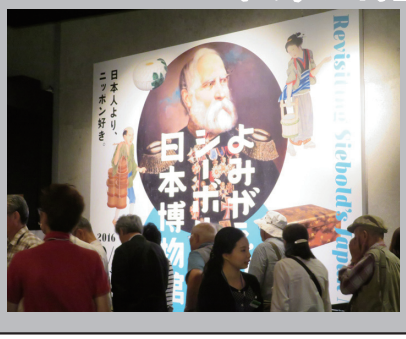
次に「江戸と弔い」のテーマで、江戸の火葬場、明治時代に「いろは大王」こと木村荘平が興した火葬場事業、大正初期の神葬祭の話などが語られました。最後は「サカサゴト」がテーマで、弔いに関する風習として、湯かん、香剃り、カサモチなどの興味深い話が伺えましたが、用意されていた切り絵が機器トラブルのため見られず、実に残念でした。

参加者106人。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成28年９月16日）

特別展「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」



９月16日(金)17時からホールで担当の小林淳一副館長による見どころ解説がありました。引き続いて、副館長の解説を聴きながら特別展を見学しました。今年はシーボルト没後150年に当たり、ミュンヘンから里帰りした約300点の作品でシーボルトを魅了した「日本」を再構成しています。

第1章　日本に魅せられた男、シーボルト

最初の展示は、ひげが特徴的なシーボルトの肖像画です。聖路加国際病院の隣のあかつき公園にあるシーボルトの胸像は、この絵を参考にしたのかなと思いました。シーボルトは、文政６年(1823)に長崎出島商館付医師として来日しました。タキと事実上の夫婦生活を始め、娘イネが生まれます。その二人の肖像画もありました。イネは、日本初の西洋医学を習得した女性医師の楠本イネです。シーボルトは、江戸参府の随行が許され、同行した川原慶賀が描いた「吉原の富士」などの絵が展示されています。

第2章　シーボルトの日本研究

シーボルトが診療と医学を教えるため、文政７年長崎郊外に開設した鳴滝塾の建物模型が初公開されています。シーボルトは、収集した膨大な資料を国外に持ち出し、その資料をもとに、『日本』『日本植物誌』『日本動物誌』を刊行しました。それらの一部が展示されています。江戸時代の人々がリアルに描かれた絵を見たことがありませんでしたが、オランダ人が描いた日本人の肖像画がありました。谷文晁の『日本名山図会』の山を写して描いた「妙義山」などの絵もありました。『日本植物誌』『日本動物誌』は、動植物の図鑑にあるような精緻な絵でした。

シーボルト事件は、国禁の地図を持ち出そうとしたことが発覚して、関係した高橋景保らが厳しい処罰を受け、シーボルトは国外追放となる事件です。「カナ書き伊能特別小図」の写しがシーボルトの子孫の家で発見され、初公開されています。

第3章　シーボルトの日本展示と民族学博物館構想

シーボルトは、ライデン、アムステルダム、ヴュルツブルク、ミュンヘンの各都市で日本展覧会を開催しました。ここでは日本展覧会に関する書簡、開催した建物の絵などが展示されています。

第4章　ようこそシーボルトの日本博物館へ

シーボルトが収集した多岐にわたる物品、絵などがいろいろ展示されていますが、その一部を紹介します。歯磨き粉「梅見散」、漢詩かるた。銅製卵焼鍋(玉子焼き器)、釣瓶形虫籠(つるべ)、花見などで使われる重箱、肴を盛るための魚形蓋物(鰹)。江戸時代後期の日本で最も普及していた日本地図(シーボルトの付箋が残っている)、川原慶賀が描いた人物画帳など。

第5章　日本研究者シーボルトの最期

晩年は、自らの研究を完成させるために再度の訪日を熱望し、フランス政府や幕府に働きかけを行いましたが受け入れられませんでした。長男アレキサンダー宛の書簡、シーボルト死亡広告などが展示されています。　　参加者101人。

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

江戸博クリップ

私と博物館

都市歴史研究室　専門調査員　胡　艶紅（こ えんこう）

2016年４月から、江戸東京博物館の都市歴史研究室で専門調査員として働いている。出身地は中国・江蘇省だが、2007年９月から2015年７月まで、日本の筑波大学で歴史民俗学を専攻していた。

正直に言うと、博物館で働くなどということは、ここに来るまでは考えたこともなかった。何しろ、中国にいた時は、博物館にまったく興味を持っていなかったのである。日本に来る前に見たことがあるのは、地元の小さい博物館と、10年あまり前に行った上海博物館だけだった。当時の年齢や知識のせいもあるが、記憶にある限りでは、博物館はただ単に古い「宝物」を並べてあるだけで、退屈な印象しかなかった。

しかし日本に来てからは、民俗学を専攻していることもあり、江戸博をはじめ、東京国立博物館、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館、さらには地域の小さな郷土博物館、テーマ別の各種博物館に至るまで、様々な博物館を見学する機会に恵まれた。どの博物館も展示方法を工夫しており、さらに見学者が体験したり、楽しめたりする空間も設けている。このようにして、私は徐々に博物館への興味を強めていき、旅行する際は、地元の博物館を必ず旅行プランに入れるようになった。江戸博の募集情報を知った時も、躊躇なく応募した。

江戸博で働き始めて５カ月たったが、自分の立場が変わったのに伴い、江戸博に対する認識も変わった。外側からは、江戸博のよい点ばかりが見えていた。しかし、内側からだと必ずしもそうではない。毎月、来館者アンケートが回ってきたときは、その意見・感想を詳しく読んでみている。江戸博の一員として、来館者のアドバイスや不満に直面し、申し訳なく思ったり、悔しく思ったりすることもある。そして、江戸博は、これからもまだまだ改善できるということを実感する。そのために私ができることがあれば僥倖だと考えつつ、引き続き頑張っていこうと思う。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉘

［氷川明神社から神仙水］

渋谷氷川神社の相撲場

今回はＪＲ渋谷駅の周辺を巡ります。歩き回ると渋谷が文字通り「谷」であることが実感できます。歩いたのは朝夕の風に秋の訪れを感じる９月上旬でした。

氷川明神社から渋谷八幡宮

ＪＲ恵比須駅西口からバスで東京女学館前下車、氷川明神社（現渋谷氷川神社）へ向かいます。東京女学館の脇を下るのが羽沢坂で、源頼朝が飼っていた鶴が卵を産み、雛が初めて羽を打ったという羽沢（羽根沢）はこの辺りです。坂下の六差路から常陸宮邸を右手に見て進んでいくと、その先に「常盤松の碑」があります。元は樹齢400年余の名木があったといい、源義朝の側室常盤あるいは世田谷城主・吉良頼康の側室常盤が植えたと伝えられています。また、向かい側の吸江寺には明和６年（1769）銘の鐘が今も残っています。隣の國學院大學から流れてくる雅楽の調べに誘われて歩いていくと、構内の社では神職養成講習会の最中で、学生が神官や巫女に扮して神事の実習を行っていました。

さらに進むと左手に氷川神社の脇参道があり、鳥居手前の右側には江戸郊外三大相撲の一つであった金王相撲の土俵場が残されています。社務所で話を伺うと、現在でも年に数回子供相撲大会が行われているとのことでした。正面参道から通りに出て左へ曲がると、別当寺であった宝泉寺の参道があり、その先にコンクリート造りの小さな本堂が建っています。

氷川神社の横を通って戻り常磐松小学校脇の道を行くと、渋谷八幡宮（現金王八幡宮）一の鳥居の正面に出ます。社殿右脇には、義朝に仕えた渋谷金王丸の忠節をしのんで頼朝が移植したという金王桜が植え継がれて、今も旺盛な姿を見せています。社務所脇の宝物殿には宮神輿や御鳳輦などとともに、幕末期に奉納された３枚の算額が展示されていました。今見ても興味深く、当時の人たちの知的好奇心を垣間見る思いです。また境内の一角には金王丸の木像を祀った金王丸御影堂（図会では金王麿影堂）も残されています。

富士見坂から金王麿守り仏正観世音

社殿左手の道から右へ下ると明治通りに出ます。この辺りの渋谷川手前の一帯はかつて堀の内と呼ばれており、図会では金王麿産湯の水・玉池などこの地にあった多くの名所が取り上げられていますが、痕跡は全く残っていません。陸橋を渡り渋谷ヒカリエを通り過ぎると、右手に上るのが富士見坂（現宮益坂）です。元々は富士見坂でしたが、正徳３年（1713）に渋谷宮益町ができてから宮益坂とも呼ばれるようになりました。

▲長谷川雪旦　富士見坂一本松

さらに明治通りを宮下公園に沿ってしばらく歩くと、左手に金王麿守り仏正観世音が安置される長泉寺があります。案内板ではこの菩薩像を金王丸の守護仏「人肌観音」としています。また墓地の奥には200体以上の石仏群があり、素朴な姿を見せています。いずれも民間で造られたもので、徐々に集められたものだそうです。

元来た道を戻り宮益坂と反対方向へ曲がると、大勢の人が行き交う渋谷駅前のスクランブル交差点へ出ます。四方の道はいずれも緩やかな上り坂となっており、ここが渋谷の谷底であることがよく分かります。

道玄坂から神仙水

渋谷駅前から、SHIBUYA 109の左側を上っていくのが道玄坂です。図会では坂名の由来を和田義盛一族の大和田氏道玄としていますが、坂の途中にある石碑では渋谷一族の大和田太郎道玄となっています。現在でも繁華街として賑わっており、９月中旬の金王八幡宮例大祭では神輿連合渡御が行われます。

道玄坂を上り切って玉川通りを進んだ左手の渋谷ガーデンタワー辺りには、山賊となった道玄が往来の人を見下ろしたという道玄物見の松がありました。図会の書かれた当時にはすでに枯れていたようですが、挿絵には松の所から道玄坂・富士見坂方面を眺めた景色が描かれています。現在では高速道路に遮られて道玄坂すら見えません。

玉川通りの向かい側は神泉町で、かつてこの辺りが神泉（仙）谷と呼ばれていたことに由来します。この谷には空鉢仙人が不老長生の仙丹を練ったと伝えられる霊泉「神仙水」がありました。通りから井の頭線神泉駅に向かって下り斜面となっており、駅の辺りが谷底になっているようです。また、駅の付近には古くから弘法湯と呼ばれる湧き水があり、江戸時代には共同浴場、明治中期以降は歓楽街として栄えました。戦後は銭湯となり昭和51年（1976）に廃業しましたが、駅前には明治19年（1886）建立の「弘法湯の碑」があり、かつての面影を伝えています。

【取材】歩いた人（文・写真とも）：
広報部会・菊池真一
（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

催事案内

古文書講座

◆各編とも来年１月から第３期を開講

各期、改めてお申込みいただくことになっておりますので**ご注意**ください。自動継続ではありません。なお、人数に余裕のある中級編の受講はおすすめです。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：1／11(水)、2／1(水)、3／1(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1／18(水)、2／15(水)、3／15(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：1／21(土)、2／18(土)、3／18(土)

- 時間：各講座とも、午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時

(注意)各講座とも、午前の講座か午後の講座かの希望を明記してお申込みください。

- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- 参加費：各講座とも全３回1,500円(初回一括払い)
- 申込締切：各講座とも11月30日(水)必着

◆第２期の残日程
入門編11／2(水)、初級編11／16(水)、中級編11／19(土)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展　「戦国時代展　A Century of Dreams」

◆戦国時代といえば、相次ぐ戦乱と秩序が乱れた時代をイメージします。他方、その裏側では、有力大名がそれぞれの地方で領国経営に力を入れ、成熟した京都の文化を取り入れた独自の地域文化を形成した時代でもありました。本展ではたくましく躍動した人々の姿と共に、新しい視点から見た「戦国時代像」を描いています。

- 開催日時：11月25日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説　齋藤慎一学芸員
  17時30分～19時：特別展示室自由観覧
- 申込締切：11月14日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／１階特別展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】瀬谷葉子・玉木達二(事業部会)

友の会セミナー

第 171 回「行徳と江戸を結ぶ舟運」

講師　菅野洋介さん(市立市川歴史博物館学芸員)

◆江戸の日本橋小網町三丁目先、日本橋川と箱崎川が交差する所に行徳河岸があり、江戸と行徳(千葉県市川市)を結ぶ舟は行徳舟と呼ばれ毎日運航されていました。江戸の人々の生活にとって大切な塩の供給地として有名な行徳の位置・歴史・産業そして江戸幕府の関わり方などに触れながら、塩以外にどんなものを運び、行徳舟がどのような水路を利用したか。主に幕末から明治期にかけての行徳舟の変遷、そして関東最大を誇った行徳の塩浜は、いつどのような終焉を迎えたかについて地元の市立市川歴史博物館の学芸員にお話していただきます。

◆講師略歴：かんの・ようすけ
1975年福島県生まれ。2004年駒澤大学大学院人文科学研究科歴史学専攻博士後期課程満期退学　博士(歴史学)市立市川歴史博物館に学芸員として勤務。市川市史の編纂事業などにも関与。著書に『日本近世の宗教と社会』(思文閣出版 2011年)がある。駒澤大学非常勤講師も務めている。

- 開催日時：12月17日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：12月５日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第 172 回「江戸町人の四季と衣装」

講師　菊地ひと美さん(江戸衣装と暮らし研究家)

◆四季の寒暖に合わせた衣替え(綿入れ～袷～ひとえ)や「嫁入り条件は縫えること」に象徴される女性とお針仕事・家族の着物作りの関係、庶民の外出着・日常着、商人・職人の衣服(仕着せ)などを手始めに、浮世絵による四季別のコーディネイトや髪形の解説、江戸後期の、江戸の粋、渋い色や男の縞・格子、女の裾模様など男女の流行の解説など、四季折々の江戸町人の着物を紹介していただきます。

◆講師略歴：きくち・ひとみ
1955年仙台生まれ。衣装デザイナーを経て早稲田大学や江戸東京博物館で学び、江戸に関する著作活動(絵と文)に入る。身分別、流行を含む総合的な江戸の衣装が専門。日本橋再開発に起用された絵巻は、現在江戸博正門前に30mで展示中。雑誌『ミセス』では、東大のロバート・キャンベル教授と“江戸の粋”対談。『江戸衣装図鑑』(東京堂出版)、『江戸の暮らし図鑑　女性たちの日常』など著書多数。

- 開催日時：１月14日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：１月５日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】林　正信(事業部会)

会員資格の6カ月延長の措置について

友の会会長　畠中　勇

先般、会報『えど友』で藤森館長も述べられておりましたが、江戸東京博物館は東京オリンピックに向け、ホールを中心とした改修工事を行うことになりました。それに伴い、平成29年10月から平成30年3月までの半年間は全館休館になります。また、再開後の平成30年4月から平成31年3月までの1年間も、常設展は観覧できる見込みですが、特別展は開催されず、ホールなども使用できない状態が続きます。

こうした事態により、友の会の活動は大きな制約を受け、会員の皆さまには大変なご不自由をおかけすることになります。

友の会ではこのような事態への対応策を種々検討しておりますが、当面の特別措置として、平成28年10月から平成29年9月までの間に会員資格を更新される会員の皆さまに対し、ご不自由をおかけいたしますので、その有効期限を6カ月間延長することとしました。

今後の友の会の活動に関しましては会報『えど友』で随時ご案内させていただきます。なにぶん先のことですので未定のことも多く、皆さまにはご不便をおかけすることもあるかと思いますが、どうか事情をご賢察の上、引き続き会員継続いただけますようお願い申し上げます。

【お問い合わせ先】
江戸東京博物館友の会事務局　電話 03-3626-9910
(火・金曜日の10時～12時、13時～17時にお願いします)

江戸東京博物館の全館休館などのお知らせ

- 平成29年10月1日(日)から平成30年3月31日(土)まで、ホール等改修工事のため全館休館を予定しております。
- 常設展示室(5階・6階)及び図書室(7階)につきましては、平成30年4月から開室する予定です。
- 特別展示室(1階)及び貸出施設(1階：ホール、楽屋、会議室、学習室)の再開は、平成31年4月以降の予定です。

会員優待のお知らせ

会期残り僅か お見逃しなく！

●特別展
「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」

会　期：9月13日(火)～11月6日(日)
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生900円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●特別展
「戦国時代展 A Century of Dreams」

会　期：11月23日(水)～1月29日(日)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

好評開催中！

●市民からのおくりもの2016
ー平成27年度　新収蔵品からー

会　期：10月15日(土)～12月4日(日)
会　場：常設展示室　5F企画展示室

次回予告

●「徳川宗家展」(仮称)

会　期：1月2日(月)～2月19日(日)
会　場：常設展示室　5F企画展示室

休館日

11月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

12月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

催事のお申込方法

◆普通はがきに、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号(必須)
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1
江戸東京博物館「友の会事務局」
＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第94号
平成28年11月1日発行(奇数月1日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話 03-3626-9910